

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 22

August, 2010

関西大学ニュースレター

発行日：2010年(平成22年)8月30日
発行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



■リーダーズ・ナウ ー5

在学生ー 体育会サッカー部 主将
経済学部4年次生 藤澤 典隆さん
卒業生ー CA 店主 福原 悟史さん

■研究最前線

社会的信頼システムの実践モデルの追究
“信頼”のある地域社会を実現するために ー7
関西大学社会的信頼システム創生センター長
社会学部 ー 与謝野 有紀 教授

生分解性インジェクタブルポリマーの研究開発
体温でゲル化し、高い力学的強度を実現 ー9
化学生命工学部 化学・物質工学科 ー 大矢 裕一 教授

■トピックス [学内情報] ー11

2011年大学院新研究科開設

●東アジア文化研究科
「文化交渉学」の可能性を追求する
東アジア文化の世界的教育研究ハブ

●ガバナンス研究科
望ましい社会を実現するためにー
ガバナンスを担う「高度公共人材」養成

■社会貢献・連携事業/地域連携 ー13

高槻ミュージックキャンパスに
市民向け児童図書館が開館
関西大学児童図書館・
高槻市立中央図書館ミュージック子ども分室

かんたい 明日香 まほろば講座
明日香村との地域連携事業を首都圏で展開
吹田市制施行70周年記念事業大学主催事業
4大学・1研究機関合同講演会で楠見学長が講演

■関大ニュース ー15

タイ王国司法府と協力基本協定を締結 ほか

「考動力」で 国際社会に貢献

若者は世界の重要な問題を解決するために学ぶ

■対談

レー ドック リュウ(ベトナム社会主義共和国総領事館 総領事) × 楠見 晴重(学長)

「考動力」で国際社会に貢献

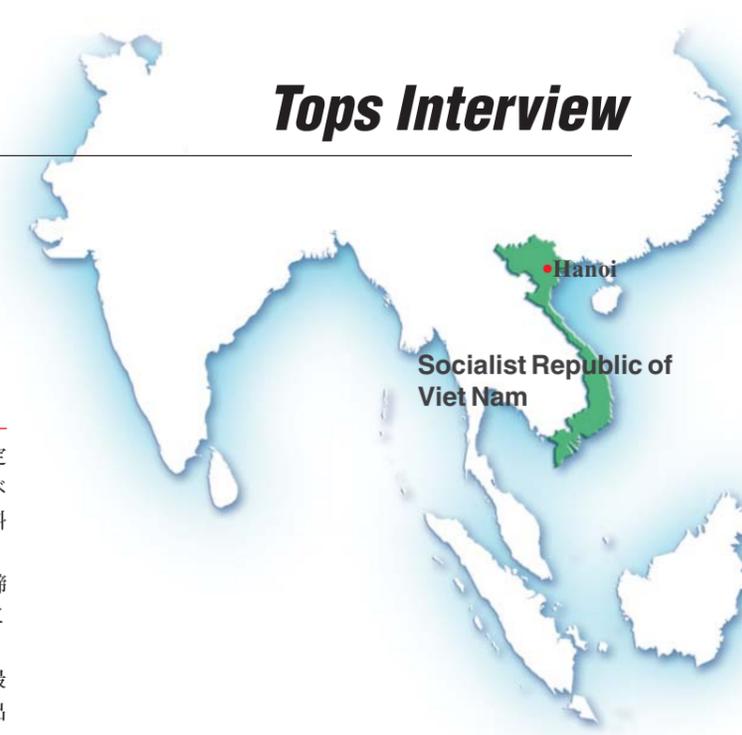
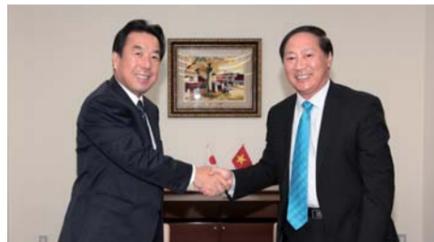


若者は世界の重要な問題を解決するために学ぶ

●レー ドック リュウ ・ベトナム社会主義共和国総領事館 総領事

●楠見 晴重 ・学長

ベトナムは近年、戦争の痛手から立ち直って活気にあふれている。ベトナム社会主義共和国総領事館のレー・ドック・リュウ総領事と楠見晴重学長との対話は、科学技術、歴史、国際交流をめぐって展開された。関西大学が標榜する「考動力」は、世界の若者に向けて発信すべき強力なメッセージとなるのだ。



◆ベトナムの3大学と学術交流協定を締結

楠見 関西大学は現在、ベトナムの3つの大学と学術交流協定を結んでいます。まだ交流の歴史は浅いのですが、2005年にベトナム国家大学ハノイと、2009年に貿易大学およびハノイ工科大学と学術交流協定を締結しました。

レー・ドック・リュウ総領事は、ハノイ工科大学との協定締結に先立って、同大学の副学長と一緒に関西大学に来られたことがありますね。私が環境都市工学部長の時でした。

レー ハノイ工科大学は、ベトナムの自然科学系の大学では最も有名です。自然科学分野の優秀な人材の多くはこの大学の出身者で、ベトナムの発展のために重要な役割を果たしています。

楠見 ベトナムは活気にあふれた国で、向学心に燃える若い人が多く、みんな非常によく勉強します。ベトナムの大学とは、これからもっと密な交流をしていきたいと考えております。

レー 最近、ベトナムはITの分野が強くなり、日本やアメリカなど海外のソフトウェア開発の現場でもベトナム人技術者が活躍しています。海外在住のベトナム人の数は約300万人ですが、そのうち自然科学分野の人材が約30万人も含まれています。例えば、アメリカの航空宇宙局(NASA)の中にもベトナム人がいます。

楠見学長は地盤や地下水を専門に研究されているそうですが、ベトナム政府は自然科学の研究を重視しています。特に気候変動や水不足は世界の国々で問題になっており、ベトナムも例外ではありません。ベトナム政府はこの問題の解決のためには他の国と協力し、例えば日本などの先進国の協力を得て、気候変動や水不足を克服する対策を取ろうとしています。

楠見 私が2002年にベトナムへ行ったとき、ハノイでベトナム国家自然科学センターの方々と私たちのグループの間でシンポジウムを開きました。私が地盤や地下水を専門にしているということで、ハノイ市建設局の方から地盤沈下について意見を求められ、現場も見に行きました。ハノイもそうですが、上海、台北、バンコク、また、ヨーロッパではアテネなど、上水道の水源を地下水に頼っている都市では、少なからず地盤沈下の問題が起きています。

◆学術フォーラム「ベトナム・フエ研究最前線」開催

楠見 総領事として日本に赴任される前は、どこの国でお仕事をされてきたのですか。また関西や大阪の印象はいかがですか。

レー 私は東南アジア・南アジア・太平洋地域を担当する局(第2アジア局)に所属し、カンボジア、ラオス、インドネシアなどで外交官の任に当たりました。そして2007年9月に総領事として大阪に着任しました。

私たちベトナム人は、日本人が第二次世界大戦後の荒廃した国を立て直し、若者たちが頑張って学び働いて豊かな社会を築いてきたことを高く評価しています。

日本の中でも関西は、大阪(難波宮)、奈良、京都という古い都のあった地域です。日本には世界遺産のうちの文化遺産が11件ありますが、関西地域だけで5件を数えます。また、能や文

楽、歌舞伎なども、とても貴重な文化財だと思います。私は大阪に来て、科学テクノロジーの発展と同時に、日本の古来の伝統文化や歴史が受け伝えられてきていると感じました。

楠見 日本とベトナムの間にも、古くから交流の歴史があります。7月10日、11日の両日、関西大学で「ベトナム・フエ研究最前線」と題する学術フォーラムが開かれました。これは文部科学省グローバルCOEプログラム「関西大学文化交渉学教育研究拠点」のプロジェクトの一環で、内外の多くの研究者がフエ都城周辺集落や文書群の調査研究の成果を発表しました。

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、2008年から若手研究者が中心となってフエでのフィールドワークを実施しています。昨年はフエ科学大学歴史学部で、「フエの文化と歴史」をテーマとする学術シンポジウムも開催しました。

レー それは大いに期待される研究プロジェクトですね。歴史を知ることは、異文化の理解と文化的な交流を深めることにつながります。昔のベトナムと日本、なかでもフエと日本との関係の歴史をさかのぼれば、忘れることのできない人物がいます。フエ出身の僧、仏哲です。インドで仏教を学んでから唐に入り、736(天平8)年に日本へ渡り、奈良の大安寺に住んで、「菩薩」[抜頭]といった舞や「林邑八楽」といわれる音楽を伝えました。当時、ベトナムは林邑国と呼ばれていて、舞の名人も日本に連れていったのです。東大寺大仏眼供養会の際には、舞と雅楽を伝授しました。

その後16世紀になると、ベトナムでは王様もいましたが、実際に権力を握っていたのは將軍です。フエを本拠地に阮氏政權が現在のベトナムの中南部を支配していました。將軍政權ということでは、日本の徳川幕府と同じですね。17世紀初めには数多くの日本人商人たちがフエやホイアンなどのベトナムの都市に出向き、貿易や商業活動を行っていました。また、そこに住んだ人々たちによって日本町が形成されました。ホイアンには約80世帯、1000人ぐらいの日本人が住んでいたといわれ、長さ約350メートルの通りの両側に日本風の建物が建ち並んでいました。日本人橋と呼ばれる来遠橋があり、建物の一部は今も残っています。

■対談



レー ドック リュウ (LE DUC LUU)
1955年ベトナム国ハノイ市生まれ。71～76年ベトナム軍兵士。76年ハノイ外交大学入学、81年卒業。88～90年ラオス国家大学ラオス語専攻留学生。その他、シンガポール、アメリカ・ハワイなどで海外短期研修に参加。81年から外務省東南アジア・南アジア・太平洋局(第2アジア局)職員。83～87年在カンボジアベトナム大使館アタッセ、後に三等書記官。92～95年在ラオスベトナム大使館二等書記官。96～2000年在インドネシアベトナム大使館一等書記官。外務省第2アジア局東南アジア課長、外務省副局長兼労働組合委員長などを歴任。07年9月から外務省局長・在大使館ベトナム社会主義共和国総領事。

楠見 私は2002年にベトナムを訪れたとき、ホイアンにも足を延ばして日本人橋を渡りました。それにしても、総領事は歴史にお詳しいですね。

レー 機会があれば日本の大学で若い人たちに対して、両国の関係について詳しく説明させていただきたいですね。

楠見 それはぜひお願いいたします。

◆「自分の国だけを考えず、国際的な人に」

楠見 総領事がおっしゃったように、関西・大阪は日本の歴史や伝統を伝えるとともにアジアとの結びつきが強い地域です。関西大学はそういう所にある大学です。私は昨年の10月に学長に就任してから「ハブ大学構想」を提唱しており、首都圏と並んでたくさん大学の集まっている関西圏の大学として、アジア太平洋地域を重要視しつつ国際化を図り、世界に向けて発信する使命があると考えています。特にアジア地域の大学との国際交流をもっと盛んにして、アジアの留学生を

グローバル化が進むなか、
青年たちは自分の国のことだけを
考えてはいけなと思います。
国家的な人ではなくて、
国際的な人になってほしい。

多数受け入れようとしています。もちろんベトナムの若い人もどんどん関西大学に来ていただきたいし、関西大学の学生もアジアの国々に出ていってほしいと思っています。

ただ残念なことに、近ごろ日本の若者は海外に目を向けなくなってきているのです。東南アジアで日本町をつくったころ、あるいは明治維新後に欧米の進んだ科学技術や社会制度を学んだころの日本人は、進取の気性に富んでいたと思います。関西大学では学生が積極的に海外に目を向けるようになればと、さまざまな取り組みをしているところです。語学力はもちろん、特に異文化の人とのコミュニケーション能力をしっかりと身につけてもらう取り組みを進めています。総領事はいろいろな国で仕事をしてこられました、若い人たちにはどのようなことを望まれますか。

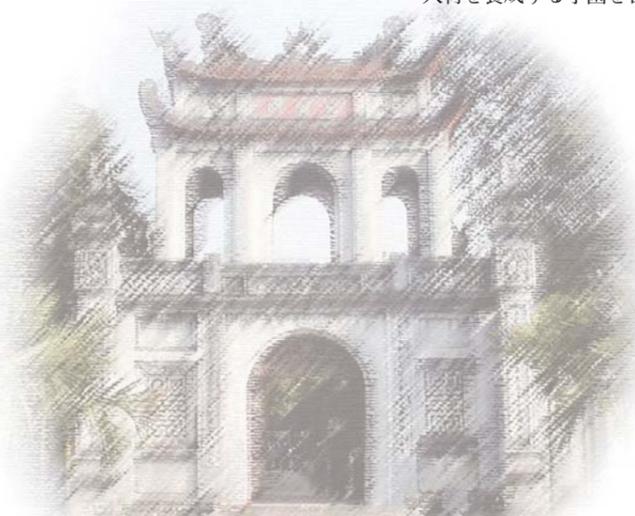
レー グローバル化が進むなか、青年たちは自分の国のことだけを考えてはいけなと思います。国家的な人ではなくて、国際的な人になってほしい。なぜかという、自分の国の問題だけではなく、国際的な問題、世界の問題を解決しなければならないからです。例えば、気候変動に対処しようとするれば、一つの国では、また一人では何もできないでしょう。外国との協力が必要ですし、他の人の協力を得て一緒に解決しなければなりません。とりわけ世界の重要な課題を解決するためには、若い研究者や専門家の貢献が望まれます。

ベトナムと日本の両国間で交流事業が行われていますが、日本政府が提案している民間レベル、草の根レベルの交流は高く評価すべきものです。今後5年間でベトナムの青年約2000人を日本に招いて交流させる計画です。また、ベトナム政府の計画では、2020年までの10年間で約1000人程度、博士課程留学生を日本に派遣することを想定しています。さらに、未来に向けて人材育成や高等教育の進展のために、各大学や研究機関との交流を促進しています。日本で定年退職を迎えた大学の教授や専門家をベトナムに招き、大学や研究機関で研究活動を続けてもらう計画もあります。

◆ハノイ・文廟の石碑が語る人材育成の重要性

楠見 ベトナムの若い人たちは、非常に勉強意欲が高いで

1070年に建設された文廟。
境内にはベトナム最古の大学が
1076年に開設された ▶



関西大学では学生が積極的に
海外に目を向けるようになればと、
語学力はもちろん、特に異文化の人との
コミュニケーション能力をしっかりと
身につけてもらう取り組みを進めています。

すね。タイのバンコクにあるアジア工科大学院(AIT=Asian Institute of Technology)で毎年、日本の土木学会とタイ王立工学協会との共催で地盤工学に関するシンポジウムを開いていますが、AITの各学科すべて、トップの成績を取っているのはベトナムの学生だと聞きました。ベトナムの大学生は、英語を不自由なく話せるほかに、第二外国語として日本語を学んでいる人もかなりいるそうですね。

レー そのとおりです。ベトナムでは今、日本語は人気がある言語です。ベトナムの若者が学習する外国語は、まず英語、次いでフランス語、ロシア語、中国語、日本語です。日本語教育は、大学だけでなく高等学校でも行われています。ハノイ市内には、日本語を教えている高等学校があります。関西大学と学術交流協定を結んでいる貿易大学は、ベトナムでは日本語教育で知られています。

ベトナムは今年、ハノイ遷都1000年記念の年に当たります。ハノイには1070年に建てられた文廟があります。孔子を祭るために建立された廟ですが、1076年にはその境内にベトナムで最初の大学が開設されました。文廟の中には、15世紀以降、約300年間にわたる科挙(官吏登用試験)に合格した人の氏名が刻まれた石碑が並んでいます。石碑の意味するところは、「人材は国の元気であり、人材が強くなれば国も強くなり発展していく。人材が弱くなり、元気がなくなれば、国も弱くなっていく」ということです。つまり、大学は国の人材育成のために重要な役割を担っているのです。

◆国際社会に貢献するためにも「考動力」を

楠見 関西大学は今年で創立124年目を迎えました。現在、約3万人の学生が学び、研究しています。卒業した人は約40万人です。その人たちが日本国内はもとより、世界で活躍しています。

本学には学是といわれる教育理念があります。それは「学の実化」、つまり「学理と実際との調和」です。学問をしながら実際に社会に役立つことも考えて、それを教育に生かしていくことが大事です。また本学の中長期目標では、「考動力」あふれる人材を養成する学園を目指しています。すなわち自分の頭でよく考えて、考えたことを実行に移す、自律的かつ積極的に



楠見 晴重(くすみ はるしげ)
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業、81年同大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。専任講師、助教授を経て、02年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年理系出身者初の関西大学学長に就任。学校法人関西大学理事、文部科学省大学設置・学校法人審議会委員、社団法人日本私立大学連盟常務理事、土木学会フェロー会員、岩の力学連合会副理事長ほか。共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」など。

行動する力をつけることです。関大生はそういう「考動力」を身につけて、日本国内はもとより世界のさまざまな問題の解決に向けてどんどんチャレンジしてほしいのです。最後に、総領事から若い人たちにメッセージをお願いします。

レー どの国でも青年たちの役割はとても重要であり、未来の国づくりの源だと思えます。学長が今おっしゃった、関西大学が目指している「考動力」という標語は素晴らしいですね。私が日本の青年や学生に送りたいメッセージも、これと同じです。自分の頭で考え、自分の力で行動してください。そして、日本の国のためだけではなく、他の国のため、国際社会のためにも貢献してほしいと思います。

楠見 関西大学はベトナムの3大学と学術交流協定を結んでいますが、これからさらにベトナムの若い人たちをどんどん受け入れたいと思っています。総領事にぜひご協力をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

LEADERS NOW!

サッカーボールとともに 夢を追って

「関西大学カイザークラブサッカースクール」
で地域貢献

●体育会サッカー部 主将 経済学部4年次生
藤澤 典隆 さん

関西大学体育会サッカー部は近年、全日本レベルの実力を身につけて、この春には3人の卒業生がプロサッカー選手の道に進んだ。約160人の部員を擁し、社会的活動にも熱心に取り組んでおり、地域の子どもたちを対象にサッカースクールも開いている。主将の藤澤典隆さんの話から、自らを高めつつ地域に貢献する大学スポーツの新しい姿が見えてくる。

幼稚園のころからボールを蹴っていたという藤澤さんは、高校時代にはサンフレッチェ広島ユースで活躍した。高校3年のとき、Jリーグユース選手権大会(Jユースカップ)で日本一を達成。関西大学では今年1月から主将となった。

「新入生のメンバーは、個人レベルでのポテンシャルはすごく高いのですが、まだチームとして十分に機能するところまでっていないのが現状です。キャプテンとして意識していることの一つは、『練習の質をどうすれば上げることができるか』です。自分自身しっかりやりながら、チーム全体を見て、ちょっとおかしいなと思った選手には声をかけるようにしています」

チームとしての練習はいくつかのグループに分けて行っているが、筋トレやシュート練習などは個人に任せている。また、試合では作戦面の研究も大事だが、メンタル面も大きいという。

「気持ちの部分がとても大事で、僕は自分が調子よかったときの試合前1週間の練習メニューを再現し、例えば月曜日は筋トレとダッシュ、火曜日はランニング中心という具合に決めています」

藤澤さんにとって、もはやサッカーのない人生は考えられない



藤澤 典隆—ふじさわ のりたか
■1988(昭和63)年、京都府生まれ。小学校から中学校まで三重県で育つ。高校時代はサンフレッチェ広島ユースに所属。広島県立吉田高等学校卒業。経済学部4年次生。

い。「チームとしては日本一を目指しています。個人としてはプロの舞台に立ち、日本代表になり、目標とされる選手になりたい。関西大学サッカー部は人間性や人間関係を大事にしている、そういう人間的な部分がサッカーにつながると思います」

関西大学サッカー部は昨年4月、地域の6歳から8歳の子どもたちを対象に「関西大学カイザークラブサッカースクール」を開始した。これは元プロサッカー選手の島岡健太・サッカー部監督が近所の子どもたちに声をかけて始めたのが、正式に大学の冠をつける地域貢献事業に発展したものだ。小学生の夏休みと冬休みを除く毎週日曜日午前7時から9時まで、千里山キャンパス北広場で実施。小学校高学年や女子も参加し、約80人がサッカーを楽しんでいる。

「無邪気にボールを追いかける姿、元気いっばいの自己主張、喜怒哀楽の激しいところ、楽しそうな親子の様子など、今の自分たちにはないようなものに気づき、教えられることが多くあります。僕らが与えるものより、もらっているほうが大きいんです」

同スクールの指導方針には「夢と目標を持ち、その達成に向けて努力ができる」という項目もある。藤澤さんらサッカー部員は、ボールとともに夢と目標を追い続ける先輩として、子どもたちと一緒にピッチを駆け回っている。

野菜王子が志す “カッコいい農業”

「おいしい野菜が当たり前になってほしい」

●CA 店主
福原 悟史 さん —工学部 2007年卒業—

朝採りの無農薬・有機野菜を販売しているイケメンの又の名は「野菜王子」。テレビや雑誌で紹介されたとおり、福原悟史さん本人もお店もオシャレでカッコいいのは事実だが、農業に懸ける思いの濃さがひと味もふた味も違う。阪急芦屋川駅の近くにあるCA(クール・アグリカルチャー=カッコいい農業)を訪ねた。



福原 悟史—ふくはら さとし
■1982(昭和57)年、兵庫県生まれ。2007年関西大学工学部生物工学科卒業。大学生生活5年目に農業を志望し、6年目の06年7月、野菜の移動販売を週2回のペースで開始。卒業と同時に販売拠点を阪神間に移す。08年7月、芦屋市に販売店CAをオープン。



雑貨ショップのような棚と木の箱には、ニンジン、大根、カボチャ、水菜、山東菜、インゲン豆、マッシュルーム、ズッキーニ……。それぞれ姿形の違う野菜が存在を主張している。福原さんが早朝4~5時間かけて能勢と亀岡で仕入れてきた鮮度抜群の野菜は、農薬や化学肥料が使われていない。インタビュー中にもお客さんが立ち寄り、注文の電話が入る。芦屋市内に配達しているほか、週に2回、神戸北野ホテルに納品している。

福原さんが野菜の販売を始めたのは大学6年目の夏。阪急千里山駅とJR吹田駅の近くに車を止めて露地で野菜を並べた。卒業後も移動販売を続けて、2008年の夏に現在の場所に店を開いた。

「野菜は作り方と鮮度が良ければ、いい味のものを提供できます。工業製品ではないので、季節と天候に左右され、春に霜が降りたら夏野菜が遅れるし、長雨が続けば病気も出てくる。有機肥料を使って育てると化学肥料に比べて時間がかかり、農薬を使わなければ除草などに手間もかかる。しかし、野菜本来の味が生きています。野菜はそれぞれ個性があって、味や香りが濃くて、本来とてもおいしいもの。見た目ではなく、味で評価されるようになってほしいですね」

「おいしい野菜が当たり前になってほしい」という福原さんにとって、ショップ経営は一つの過程にすぎない。学生時代にいろいろ悩んだ末に「農業で生きていこう」と決心したときから、「農業の新しいスタンダード」を目指し、野菜と向き合い、野菜と共に生きる「農業人」を志してきた。生家が兼業農家だったので、農作業のしんどさ、採算面の難しさも分かったうえでの挑戦だった。

「将来的には生産もやっていく予定です。今やっている販売は、資金を稼ぐことと売り先を開拓するという二つの意味合いがあります。宅配事業をもっとしっかりやっていきたいし、子どもの施設や幼稚園などと一緒に食育活動もしていきたいと考えています」

高校・大学時代はカップラーメンやハンバーガーも食べていたそうだが、今の仕事をするようになって、料理も煮物などの和食を中心に自分で作っている。野菜王子の名にたがわず、「カッコいい農業」の道を切り開こうとしている異色の先輩から後輩にひと言――。

「妙な既成概念にとらわれて、自分の可能性を初めから消してしまうような生き方はもったいない。例えば、生物工学科に入ったから就職先は食品系とMRしかないとか。大学生生活は4年間しかないのに、卒業してからの人生は50年以上ある。僕は自分が真剣に打ち込める仕事をしたい、仕事をしながら楽しめるような人生を送りたいと思いました。自由に自分のやりたいことや将来の方向を見つめ直して、実際にトライしてみてください」

■研究最前線

社会的信頼システムの実践モデルの追究

“信頼”のある
地域社会を実現するために

社会的信頼システム創生プロジェクト

●関西大学社会的信頼システム創生センター長
社会学部
与謝野 有紀 教授

文部科学省平成22年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に、関西大学が申請した4件の研究プロジェクトが採択された。その一つが「社会的信頼システム創生プロジェクト」。新たに社会的信頼システム創生センター（Research center for Social Trust and Empowerment Process：略称STEP）が創設され、地域研究・連携拠点としてリサーチアトリエ「楽歳天三・天満天神楽市楽座」も誕生した。研究代表者の与謝野有紀教授に、プロジェクトの概要と研究について聞いた。

■天神橋筋商店街に地域研究・連携の拠点

— 7月9日に関西大学リサーチアトリエ「楽歳天三・天満天神楽市楽座」のオープニング・セレモニーが開かれました。開設の趣旨や今後の活動内容は？

関西大学リサーチアトリエは、社会的信頼システム創生センターが関西大学社会連携部と協力しながら、天神橋筋3丁目商店街内に設立した地域研究、社会連携の拠点です。

「楽歳天三」とは、Research Atelier of Kansai University for Social Association and Interactionの頭文字からRAKUSAIと略称される地域研究の拠点です。日本一長い商店街である天神橋筋商店街は、人通りが多く、活気のある商店街として全国的な注目をあつめています。高齢化やチェーン店の増加など、その魅力を維持していくために解決しなければならない課題も



天神橋筋商店街に誕生したリサーチアトリエ「楽歳天三・天満天神楽市楽座」



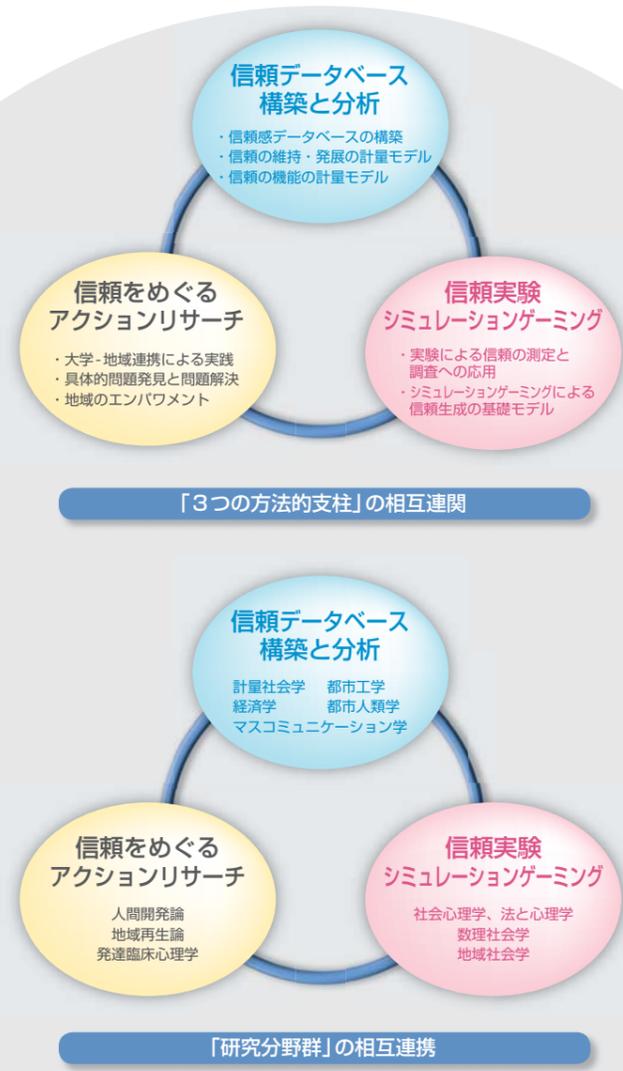
あります。そこでアクションリサーチを展開して、どこに問題があり、どう考えていったらよいのか、地域の人たちと一緒に持続的に解決法を探っていきます。通行量や店舗変化の分析、顧客の回遊状況の把握などに必要な情報も収集できます。また「楽市楽座」では、商店連合会と協力し、さまざまな連携活動を行います。

リサーチアトリエは天神橋筋のみならず、センター研究員が現在フィールドとしている地域や、関西大学が連携している自治体がかかえている問題を検討する拠点にもなります。例えば、里山の保全や限界集落の問題、都市部の高齢化対策などもその対象です。

研究の拠点と地域連携の場が同居することで、観察やデータ収集を効率的に展開できます。地域の諸問題の解決に向けて、「知識と文化のハブ」の役割を果たしていきたいと考えています。



オープニングイベントで7月9日から11日まで公開された「豊臣期大坂図屏風」のレプリカ



■信頼創生を特定地域で実践、改善例を提示

— 「社会的信頼システム創生プロジェクト」の研究代表者として、5年計画のプロジェクトの狙いや目的を説明してください。

ソーシャルキャピタル（社会関係資本）の主要素である「社会的信頼」は、満足感や幸福感といった人々の意識、自殺のような社会病理現象、里山の保全のような協力行動など、地域にさまざまな影響を与えることが、近年実証的に議論されています。他者に対する信頼があれば、自殺や犯罪が減少する、平均余命が伸びる、企業の効率が上がるなど、いろいろ言われていますが、ではその信頼を誰がどうやってつくるのかということは、ほとんど明らかにされていませんし、実践もできていません。

本プロジェクトでは「信頼はどのようにして創生することができるか」を実証的に検討し、「持続的な信頼のある地域社会システム」を具体的に設計し、設計したシステムを「アクションリサーチの立場から現実のフィールドで展開する」ことを目的としています。また、信頼の生成によって、自殺などの社会病理現象、里山の荒廃など地域の環境・経済問題をどの程度減少でき、社会・経済的効率をどの程度改善できるかを計量的に測定、評価します。机上の理論に終わることなく、特定地域において実践し、改善例を提示することを目指しています。

■3つの方法で相互に連携・補完し、課題解決へ

— 具体的な研究の方法と体制は？

社会的信頼の機能に関する研究は、社会学、社会心理学、臨床心理学、経済学、人類学の人文社会科学、そして都市工学などで横断的に展開されています。本プロジェクトでは「信頼データベース構築と分析」、「信頼実験、シミュレーションゲーミング」、「信頼をめぐるアクションリサーチ」の3つの方法的支柱を立て、相互に連携して課題解決にあたります。それぞれの方法ごとにワーキング・グループを構成し、各リーダーを中心に知識を互いにフィードバックしながら相互に補完し、円環的に連携を継続していきます。

私がリーダーを務める「信頼データベース構築と分析」チームは、地域横断的、時系列的な定量的データと人々の言説などの定性的データをデータベース化し、その統計的分析によって、日本における信頼の機能と信頼の生成・維持・発展の条件を解明します。

「信頼実験、シミュレーションゲーミング」チーム（リーダー：林直保子社会学部教授）は、一般社会人の実験協力を得ながら、現実の場面で信頼の生成あるいは破壊がどのようにして行われるかについての基本モデルを作成します。

「信頼をめぐるアクションリサーチ」チーム（リーダー：草郷孝好社会学部教授）は、研究者と地域住民が議論を共有して地域の状況と問題を理解し、データ解析および実験で得られた知見と社会モデルを参照しながら、地域の信頼システムの構築を実践します。

最終的には、地域の信頼から国家レベルに至るマクロな社会的信頼システムを創生する実践モデルを提案します。

■信頼感と自殺率の関連構造を解明

— 与謝野先生が特に力を入れている研究について。

私は社会階層と信頼の問題、階層的不平等や格差の問題に取り組んできました。格差と信頼感、自殺・犯罪など社会病理現象の間の関連構造を明らかにしたいのです。社会的信頼システムをつくることについてはいまだ明らかにされていませんが、壊れるほうに関しては少しずつ分かっています。格差があるところでは、信頼は壊れます。また、格差は共感を壊します。

日本は1998年以来、毎年3万人を超える人が自殺するという世界的な高自殺率国となっています。このような高い自殺率は、歴史的にみても特異的ですが、自殺率の抑制には社会的信頼が大きく寄与するという実証結果が出されています。

高い社会的信頼感のある地域では自殺率が低くなることは、アメリカの州単位の分析結果にも示されています。「人々は信頼できるか？」という質問に「はい」と答える人の多い州のほうが、平均余命が長く、罹患率も少ないのです。私は日本で県単位の自殺率と信頼感の関連性を調査してきました。信頼感の高い県は自殺が少なく、信頼感の低い県、例えば青森県や秋田県などは自殺が多いことがわかりました。

自殺という社会病理現象が信頼によってどんなふうに変化するのかを統計的に明らかにしたい。新しい計量モデルを適用して分析し、なんとか解決の方向を示したいと思っています。

研究最前線

生分解性インジェクタブルポリマーの研究開発

体温でゲル化し、高い力学的強度を実現

次世代医療を革新するスマートバイオマテリアルの創出

◎化学生命工学部 化学・物質工学科
大矢 裕一 教授

文部科学省平成22年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された「次世代医療を革新するスマートバイオマテリアルの創出」では、先端科学技術推進機構・化学生命工学部の8人の研究者が中心となり、高分子材料化学と生体医学の境界領域的研究に取り組み、両分野にわたる特色ある研究拠点となることが期待される。今回の研究最前線は、当プロジェクトの代表者である大矢裕一教授の研究室を訪問した。



新材料による先進的な医療を提案

— 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された研究プロジェクトのキーワード、「スマートバイオマテリアル」とは？

スマートとは「賢い」という意味で、インテリジェントという言葉に当てはまる場合もありますが、「応答する」あるいは「認識する」という意味を含んでいます。スマートマテリアルとは、温度やpHなどの外部環境や刺激に応答して物性を変化させたり、分子を識別したりして機能を発現する「知的材料」を意味し、生医学領域で使用することから「スマートバイオマテリアル」と呼んでいます。

— 研究プロジェクトの目的や目標は？

これまでの医療技術の進歩の歴史を振り返ると、医学や分子生物学の発展と、医療用の材料・機械の進歩が両輪となって、新しい治療法が生まれてきました。私たちは、新たに開発した化学的な材料(スマートバイオマテリアル)によって初めて可能となる「材料主導型」の先進的な医療、新しい治療・診断の方法を提案することを目的に研究チームを組んでいます。

関西大学化学生命工学部では、高分子系バイオマテリアルの分野で実績を持つスタッフがそろっています。それぞれターゲットにしている材料は違うのですが、今回のプロジェクトは単なる個々の研究の寄せ集めではありません。例えば、私の材料に他の先生が開発した材料を組み合わせることで新しいシステムを生み出すことが可能になり、共同での研究も進めています。5年の研究期間中に新しい材料やシステムが医療の現場で使用されるころまでは難しいと思いますが、今までになかった性能の材料を作り出して、それが医療用に役立つことを治療現場に近い人たちから認知してもらい、共同して研究を行う基盤を作る段階を現実的な目標と考えています。

室温から体温への温度上昇でゾルからゲルへ

— 有効なバイオマテリアルとして大矢先生が開発された「温度に応答して体内でゲルを形成する生分解性ポリマー」とは？

まず、ゲルとゾルの違いから説明します。ゲルというのは、水を含んだような塊で流動性がなくなったもの、例えばゼリーやこんにゃく、固まった寒天などです。ゲルに対してゾルとは、溶液状のもので、例えば石けん水や牛乳、固まる前の寒天など。流れるかどうか一つの判断基準になり、傾けたときに重力に従って流れるものはゾルであり、流れないものがゲルです。

私が扱っているものは、室温程度の低い温度では水によく溶けて、体温ぐらいの温度(37℃)になるとゲル状になる生分解性のポリマー(有機化合物の分子が重合して生成する合成高分子物質)です。

一般にゼラチンなどは、高い温度で水に溶け、冷やすと固まってゲルになります。私たちのポリマーの類は逆の現象で、室温から体温へ温度を上昇させるとゾルからゲルへと変化するので、このポリマー水溶液を注射器などで生体内に打ち込むと、体温まで温められてその場でゲル化が起こります。しかも、ゲル状態がかなり丈夫で、これまでに知られているものよりも高い力学的強度を有しているのが特長です。それによって医療分野のさまざまな用途が考えられます。

薬物徐放システム、再生医療用足場材料に応用

— 「生分解性インジェクタブルポリマー」の主な用途は？

腹腔(胃・腸・肝臓などが収まっている腹部内の空間)内や皮下などにゾル状態のポリマー水溶液を注入すると、その場所でゲルになるという性質を利用して、ドラッグデリバリーシステム(薬物徐放システム)を実現する薬物キャリアーに用いることができます。ゲルの中に入っている薬は一気に広がらないで、ゲルが分解すると同時に少しずつ放出されるので、投与回数を減らすことによる副作用の軽減や患者のQOL(quality of life)の向上、薬物濃度を一定に保つことによる治療効果の向上をもたらします。

また、細胞や細胞増殖因子と共に体内注入することにより、その場でゲル化して良好な組織再生の足場を形成することが可能になり、再生医療への応用が期待されます。形成された足場は、組織再生に伴って分解消失し、正常組織と置換され、組織が修復されます。細胞は足場がないと増えません。ゲルはもともと体の中で分解する材料でできていますから、ゲルの分解と



細胞の増殖が並行して起こるわけです。ゲル内部で細胞の増殖が可能であることは、既に確認できています。今後、学外の先生方とも連携し、実験動物などを用いて組織再生機能の評価と検討をすることが、このプロジェクトの研究課題の一つです。さらに、手術後の臓器面に噴霧することにより、術後の癒着を防止する癒着防止剤としても応用可能です。

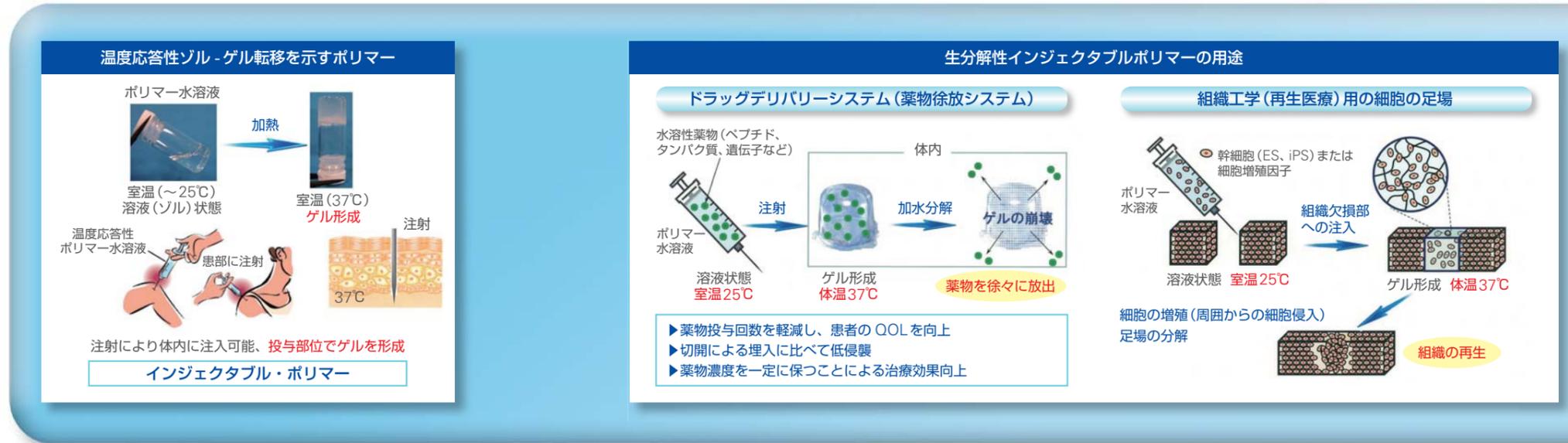
力学的強度、安全性に優れたポリマー

— 従来の技術と比較して、新技術の特長は？

従来の生分解性ゾル-ゲル転移ポリマーは、ゲル状態における力学的強度が低かったのです。私たちは分岐構造の導入などの分子設計上の工夫により、今までより約100倍高い力学的強度を実現しました。

また、ゲル化に要する時間が短く、ゾル状態の粘性も低いうえ、望ましい転移温度、望ましい生分解速度、高い生体適合性を達成しています。もちろん、分解物はすべて代謝可能であり、安全性に優れています。

治療の現場で実用になることが最終目標ですから、さらに性能を高めていく必要があります。臨床医と連携しつつ企業とも協力し、安全性試験から厚生労働省の認可までもっていきたいと思っています。





「文化交渉学」の可能性を追求する 東アジア文化の世界的教育研究ハブ

望ましい社会を実現するために—— ガバナンスを担う「高度公共人材」養成

東アジア文化研究科



関西大学は2011年4月、「東アジア文化研究科・文化交渉学専攻」を開設する。2008年に文学研究科を改組して設置した文化交渉学専攻・東アジア文化交渉学専攻が、2010年度に完成年次を迎え、文学研究科から独立して新研究科が誕生することになった。

●「グローバルCOEプログラム」から発展

関西大学は、アジア文化研究の領域で多数の優れた研究者を擁し、国際的な教育・研究活動を培ってきた。その実績が認められ、文部科学省「グローバルCOEプログラム」に、本学が申請した「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成—周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出—」が採択された。これを機に、2008年4月に文学研究科が改組され、文化交渉学専攻・東アジア文化交渉学専攻が設置された。

この専攻が2011年度より文学研究科から独立し、新たに「東アジア文化研究科・文化交渉学専攻」が開設される。これによって、広範な東アジア文化に対する本学の特色ある教育研究が一層発展し、世界的教育研究ハブとして充実することになる。

●研究枠組を越境する「文化交渉学」とは？

21世紀に入って、東アジア諸国は相互依存の度合いを一層強めつつある。それにもかかわらず、諸国間で感情的摩擦が表面化するの、他国文化に対するスタンスの未成熟があると考えられる。これを解決するには、自他の文化を優劣や強弱の尺度から評価するのではなく、一国文化をグローバルな視点から把握する視座と手法の確立が求められる。

東アジア文化研究科では、一国文化主義的発想を脱却し、東アジア文化を絶えざる他者との交渉の連鎖によって形成された複合体としてとらえる「文化交渉学」の視点に立ち、東アジアにおける文化交渉の諸相を人文学諸分野から動的・複合的に



分析して、東アジアの文化研究を大きく転換するとともに、それを共有する国際的人材を育成することを目指している。

東アジア文化研究科の教育研究の柱となる「文化交渉学」とは、東アジアという一定のまとまりの内部での文化生成、伝播、接触、変容に注目しつつ、トータルな文化交渉のあり方を複眼的で総合的な見地から解明しようとする学問だ。ここでは、従来の人文学の学問分野ごとの研究枠組の越境と、ナショナルな研究枠組の越境が求められる。東アジアの文化交渉の全体像を把握する方法を身につけ、国境を越えて東アジア全体を多様な文化接触の連鎖として認識する視座を養うことを目的としている。

●3領域のコアカリキュラム

本研究科では、東アジア文化を研究するための基本的視角として、「東アジアの言語と表象」、「東アジアの思想と構造」、「東アジアの歴史と動態」の3つの研究領域を設定している。本研究科の大学院生は、これら3領域のいずれかに自らの研究の基盤となる研究課題を設定し、そこから分野・地域の越境による展開を試みることができる。



ガバナンス研究科

(設置届出中)

来春、関西大学では初めての政策系大学院研究科となる「ガバナンス研究科」が開設される。「公」と「民」のパートナーシップを通じて、社会にとって望ましい状態を実現するという認識の高まりに応え、ガバナンスを担う「高度公共人材」を養成する。

●政府・市場・市民セクターが協働し問題解決へ

長い間、社会における問題の解決策、すなわち政策をつくりだす主体、さらにそれを実施する主体は、もっぱら政府であると考えられてきた。しかし、民間委託の推進やNPO法の制定などが示すように、最近では複雑な社会問題の解決に対する企業や民間団体の積極的なかかわりが期待されるようになってきている。行政および政治を含めた政府セクター、民間企業を含む市場セクター、そしてNPOやボランティア組織などの市民セクターが協働して問題解決に取り組み、社会にとって望ましい状態を実現するという認識が高まり、「ガバナンス」が注目されるようになってきた。

そこで、ガバナンスの担い手となることを期待されるのが「高度公共人材」である。それは、公的な問題を発見して、その解決策としての政策をデザインし、さらにそれを実現していくことができる能力を持つ人材を意味する。ガバナンス研究科では政策学を基盤とした教育・研究を行い、「高度公共人材」を養成する。

●ローカルとグローバルの2履修モデル

ガバナンス研究科は1研究科1専攻のもとで、「ローカル・ガバナンス・モデル」と「グローバル・ガバナンス・モデル」の2つの履修モデルを提示する。

ローカル・ガバナンス・モデルとは、法学、政治学、行政学、経済学、経営学などからの学際的なアプローチを通して、地域における公的な問題の解決について学ぶための履修モデル。このモデルの主たる対象は、より高度な専門能力を身につけたいと考えている地方自治体職員や地方議員およびその志望者、あるいは企業やNPO・NGOなどで、特に地域にかかわる公的問題の解決に貢献したいと考えている人になる。

グローバル・ガバナンス・モデルとは、法学、国際政治学、

経済学、経営学などからの学際的なアプローチを通して、国際レベルにおける公的な問題の解決について学ぶための履修モデル。このモデルは、企業やNPO・NGOで、特に国際的な公的問題の解決に貢献したいと考えている人や国際公務員の志望者などを主たる対象としている。

2つの履修モデルに含まれる科目をバランスよく履修することで、ローカルとグローバルを横断する視点や関心を養うことも可能だ。

●多様な修了後の進路

本研究科修了後の進路としては、国家公務員および地方公務員、国際公務員、NPO・NGOの職員、議員秘書、コンサルタント、シンクタンク職員、ジャーナリスト、民間企業(とりわけ社会貢献部門など)、起業による経営者、そして国会議員および地方議員などが考えられる。また、中学校教諭専修免許状「社会」(申請中)、高等学校専修免許状「公民」(申請中)を取得することもできる。

社会人学生の場合には、従来の職場でのさらなる活躍が可能となるだろう。さらに、政策分野に関する研究を継続することにより、高度な研究および教育に従事する研究者となることも期待される。



関西大学児童図書館・高槻市立中央図書館 ミューズ子ども分室

高槻ミュージズキャンパスに 市民向け児童図書館が開館

高槻ミュージズキャンパス西館1階に、関西大学児童図書館・高槻市立中央図書館 ミューズ子ども分室が開館された。7月14日、同図書館のオープニングセレモニーが行われ、上原洋允理事長と奥本務高槻市長があいさつし、テープカット。大学と自治体が連携することによって、大学キャンパスのあり方に新しいページが加えられた。

関西大学児童図書館・高槻市立中央図書館 ミューズ子ども分室は、本学と高槻市の連携事業の一つとして開館した市民向けの児童図書館だ。関西大学が施設および書架などの備品や図書資料を高槻市に無償で貸与し、高槻市が市民への貸出等運営業務を担当する。

児童書・絵本を中心に約16,000冊を所蔵。広さ196.02㎡の明るく開放的な館内には、インターネットの利用スペースやコルク敷きの閲覧スペースを設けている。車椅子での入館が可能で、目の不自由な方も楽しめる音の出る絵本もそろえている。また、催しもの、子ども向けのおはなし会、おたのしみ会など、楽しい行事も行っている。

貸出、返却、検索、予約など、高槻市民は他の高槻市立図書館と同様に利用できる。開館時間は平日の午前10時から午後5時まで(但し、大学の休業期間中は除く)。



子どもたちに読み聞かせをする奥本務高槻市長(左)と上原洋允理事長

● かんだい 明日香 まほろば講座

明日香村との地域連携事業を首都圏で展開



800人以上が参加した「かんだい 明日香 まほろば講座」

関西大学と奈良県明日香村との共催(朝日新聞社後援)による第7回「かんだい 明日香 まほろば講座」が6月20日、東京・有楽町の朝日ホールで開かれた。

関西大学と明日香村は、高松塚古墳の発掘以降、緊密な関係を築いてきた。2006年度に「地域連携に関する協定書」を交わし、本学の教育・研究の成果と日本の「まほろば」明日香村の持つ長い歴史と豊かな文化資源を活用した連携事業を展開している。

2008年度からは首都圏での地域連携事業として、飛鳥文化を通して日本の歴史・文化、そこに暮らす人々との交流について共に考える「かんだい 明日香 まほろば講座」を開催している。

今回のテーマは「国際交流都市 あすか」。当日は800人以上が参加し、「飛鳥の亀形石槽施設—斉明天皇の政治と饗宴—」と題する奈良大学名誉教授・水野正好氏の講演と、朝日新聞記者である天野幸弘氏のコーディネートによるパネルディスカッションに聴き入った。パネルディスカッションでは、水野名誉教授のほか、滋賀県立大学の田中俊明教授、国立歴史民俗博物館の林部均准教授、本学文学部の高橋誠一教授をパネリストに、各専門分野からの活発な討論が行われた。

次回の第8回講座は9月25日、第9回講座は2011年1月22日に、関西大学東京センターで実施の予定。参加費は無料だが、事前申し込みが必要である。講座全般についてのお問い合わせは関西大学地域連携センター(TEL.06-6368-1245)、お申し込みについては奈良県明日香村役場 政策調整課(TEL.0744-54-2001、URL: <http://www.asukamura.jp/>)まで。

吹田市制施行70周年記念事業大学主催事業

4大学・1研究機関合同講演会で 楠見学長が講演

関西大学千里山キャンパスのある吹田市は、2010年4月1日に市制施行70周年を迎えた。これを記念し、市内にある4大学(関西大学、大阪大学、大阪学院大学、千里金蘭大学)、1研究機関(国立民族学博物館)が、吹田市制施行70周年記念事業「大学主催事業」を実施した。



千里山キャンパスで開催された岡本全勝氏による講演会



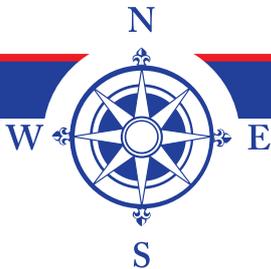
(写真右・下) 「地下水から見える関西文化の源流」というテーマで講演を行った楠見晴重学長

本学では地域連携センターが6月26日、千里山キャンパスにて「関西大学講演会」を開催した。講演では、総務省消防庁消防大学校長(当時)の岡本全勝氏が、「地域社会とリスク」をテーマに、地域社会におけるリスクの近年の変化と現状、今後の課題について述べた。

また、4大学・1研究機関合同企画として「吹田の知 集結&発信」合同講演が、7月11日にメイシアター大ホール(吹田市泉町)で開かれた。本学からの講演者は楠見晴重学長(環境都市工学部教授)。楠見学長は「地下水から見える関西文化の源流」というテーマで、水と都市・文化について、主に京都を例に挙げて説明した。京文化の雅と伝統の背景に、豊富な地下水がかかわっていたことを、関西大学で行った研究の成果を踏まえて紹介した。

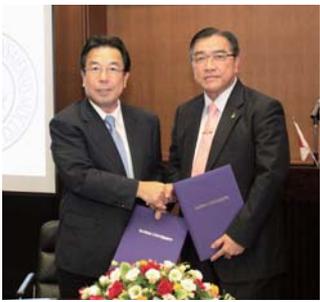
講演前には、約100人の関西大学応援団が200人を超える聴衆の前で記念演舞を行い、本事業に花を添えた。





タイ王国司法府と協力基本協定を締結

関西大学とタイ王国司法府(司法裁判所)は、協力基本協定を締結した。7月16日、楠見晴重学長とタイ王国司法府のウィラット・チンウィニクン事務総長らが出席し、調印式を執り行った。



タイ王国司法府のウィラット・チンウィニクン事務総長(右)と握手を交わす楠見晴重学長

この協力基本協定は、共同研究やタイ王国裁判官および裁判所職員の本学での研修受け入れを通じて交流を促進することを目的とするもので、本学にとって初めての海外公的機関との協定になる。

関西大学とタイ王国司法府は、本学マイノリティ研究センターでタイ王国の裁判官・裁判所職員対象研修セミナーを昨年から実施し、本学教員がタイ王国司法府で講演を行うなどの交流実績がある。



タイ王国の理科教員が関大一中・一高で研修

タイ王国の理科教員31人が6月15日、日本における最新の教育事情を学ぶために、関西大学第一中学校・第一高等学校を訪れた。今回来校したのは、タイ王国の地方教育機関に所属する小学校、中学校および高校の教員で、中学校の理科、高校の生物と化学の授業を参観した。

午後からの意見交換会では、関大一中・一高の教育システムや理科のカリキュラム・指導法について多くの質問が寄せられるとともに、本校からはタイの授業内容について質問が出るなど、活発な質疑応答が行われた。



この研修会が国際化時代に対応した教育や、授業方法の研究・改善を考える機会になり、双方にとって実り多い会となった。

◀ 関大一中・一高の授業を参観するタイ王国の理科教員たち

本年4月開校の関西大学中部部・高等部で
 ホワ・チョン校中国民族楽団が公演・交流



高槻ミュージックキャンパスで関西大学中部部・高等部が6月15日、シンガポールのホワ・チョン校中国民族楽団(Hwa Chong Institution Chinese Orchestra)の公演会と交流会を実施した。1919年設立の同校は、勉学のみならず芸術の分野にも秀でた伝統校で、同楽団は数々の大会で輝かしい実績を残してきた。

北館アリーナで行われた公演会に参加した中部部・高等部の生徒、保護者、教職員らは、オーケストラによる中国の民族楽器を用いた独創的な素晴らしい演奏に聴き入り、アンコールでは「ウィリアム・テル序曲」のリズムに合わせて、大きな手拍子で公演を締めくくり、大いに盛り上がった。演奏会後のレセプションでは、中部部・高等部の生徒が琴や剣道、篠笛といった日本の伝統芸能を披露し、折り紙を一緒に行うなど、双方の交流を深めた。



高等部では、今春入学した生徒が2年次生になる次年度、海外研修旅行としてシンガポールの同校を訪問する予定。両校が相互に訪問し交流することで、一層の国際理解につながることが期待される。

関大一高サッカー部からプロサッカー選手に

関西大学第一高等学校3年生で、サッカー部所属の梅鉢貴秀うめばたたかひでさんが、鹿島アントラーズの2011シーズン新加入選手に内定した。



同校サッカー部の佐野友章監督は「昨年の選手権までは脚光を浴びることがなかった彼ですが、いつも真面目にサッカーに取り組んでいました。強い気持ちと謙虚さを持った選手です。プロの世界は、想像を絶するほど厳しいでしょう。でも想像を絶する楽しさや充実感もあるでしょう。2014年W杯を目指せる選手になってください」とエールを送っている。

同校サッカー部は1951年創部で、部員数68人。本年1月の第88回全国高校サッカー選手権大会では、「月まで走れ!」を合言葉に快進撃を続け、並み居る強豪校を破ってベスト4に輝いた。